Inches
Centimetres
KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

新撰茶譜 全

ホ2
453

藤原淑蔭大人著

活語新論 全

江戸書肆 玉山堂

利 488
門 ホ利2 號 949 卷
東京帝國大學圖書之印
醍醐藏書
明治七年八月六日醍醐氏寄贈

活語新論序

夫人雖曰萬物之靈。非言語無以視其為靈也。然則言語亦靈妙哉焉。況我　皇國之言語。平易直達。支那人亦譽之云。其他之蠻夷。惡有足企及焉。彼言靈幸國之稱。信有所以焉。況又活用之多端。皆是自然之活用。而凡人之智有不可測者。然彼詞瓊綸八衢等之撰者。皆欲強究

其靈妙然不能必合三轉四種之常格而以不合難為訛言者設以變格之目斯誠困難之說誰許曰穩妥之釋兵槿亭氏疑此久矣頃有所得以為印定者却不可以為靈妙因以考彼此不可強解者每每有之終録以為一篇名曰活語新論以著難解之中自有不測之神理備焉學者若先得此書之意而後攻古言於彼活用之例當免牴牾之累矣書成需予言予素雖不識古言嘗已知槿亭氏精於斯乃又此書之精覈不足費辯也遂不揣固陋書之以為序

文久三年癸亥孟春吉

川越　奚疑齋侗翁識

[illegible]

[illegible]

[illegible]

活語新論

藤原淑蔭著

言語の活用ハ。五十連音の第一音より。第四音まで活轉する一種。はゝ第二音より第三音ゝ活轉して。其ノ三音ゝ苗礼を添る一種。はゝ第四音より。第三音ゝ濁りて。其ノ三音ゝ苗礼を添る一種。はゝ第二音ゝ苗礼を添る一種。是を四種の活用と云。かくて其ノ四轉ハ第一音ゝていはゝはゝ語をかけば。譬ハ行をゆかと云類ひよて。受辞のんず等ゝて。ゆかんゆかずゆ調て。將然言とゝるゝ如し。第二

音ゆく轉て。ゆき連用第三音ゆく截斷と連躰とを兼ぬ。第四音ゆけ已然と使令とを兼さり。已然ハ何レの活ふるも古曾の結辭。連躰ハ曾也加等の結辞截斷ハ波毛等の結辞ふり。此四轉て。カ。サ。タ。ハ。マ。ラの六行ふ有て。又第二第三の二轉ハ譬ハ老て第二音れれ連用。んず等を受て將然。使令ハ第二音ふ與を加ふるなり。此格カ。タ。ハ。マ。ヤ。ラ。ワの七行ふ有て。又第四音より第三音ふ登る二轉ハ。譬ハ誉て第四音ほめ連用。んず等を受て將然第三音ほも截斷。苗を加へて連躰。礼を添て已然。使令ハ第四音ふ與を加ふるなり。俱与の添ざるも有り。此格ア。カ。サ。タ。ナ。ハ。マ。ヤ。ラ。ワの十行ふ有て。又第二音無轉の活用ハ。譬ハ見て。み連用。んず等を受て將然。苗を加へて截斷と

連用とを兼ね。礼を添て已然。使令ハ第二音ふ與を加ふるなり。此格カ。ナ。ハ。マ。ヤ。ラの六行ふ有て。此四種て活用の大躰ふて。其他ちゝくきちくちくき変格等の活用ふて。今世語格を云革是を定則ふて。此事下ふ辨ふるを見る。但し如此云ハ。此仮初の規則ふ心得ざ。千言萬語其用法も。大方知らるゝやうふれ。ゝも詞の活用ハ以ふ奇しく霊しき物ふて。上ふ挙ける常格ふて。盡く其意を推究るふ。ふて。其詞をかゝく論たふ。立て四段ハ自然。下二段ハ自然ふ令然ふるを。折ハ四段ハ令然。下二段ハ自然ふて立とハ其意表裏ふて。悉學て四段中二段

ゐ段。ハ段。ナ段。マ段。を二方ゐ活て。異ゐるゝ点無く。埋て四段ヤ段

ゐて自他を兼ると。詞ハ衢ゐ令然を下二段ゑ〜て挙さるゝ誤ゐり。又うめ点云詞ハ。同語のやうゐふ点聞めれど。うづめハ物を埋蔵ゐ云ゝうめて陷四を充實ゐするを云ゝて別語ゐり。はまバうづむゝ埋。うめハ塡の意ゐり。古ゝ活用ゐ拘りさるゝ点ゑ。恨も中あらぬど。ふと思ゐ出さるまゝ。聊辨へ知ゐ変り。

二段ラ段。サ段。のうゐて。四段サ段。ヤ段。ゐ活さる例ゐく。賜ハ他の上ゐ云ハ四段ハ段。バ段。ハ段。ヤ段。ゐなるを敬ひて自ゐうへゐ云ゝて下二段ダ段。ヤ段。ゐ。俱四段ゐる古く乙後ゐ乙をり〜見えさゐ。又のさまふと云ゝ詞て詔賜の意ゐて。他の上ゐ云ゝ詞ゐるをまれゐて自のものゐふを云さるゝ有賢木巻ゐ「ゐ祢ゐる人ゐのさまむ見む」同書「ちゝ〜ゐせゐ」ちど有り。我が云ゝをのさまをむゐきゝてべらばうゐれど。敬語を自のうへふと云ゝむハ理ゐこのゞゐろゐて。先の人を敬ふハ前と同ゞゐ云ゝ分て四段ラ段。サ段。ヤ段。下二段ラ段。ヤ段。

ゐ段。ニ段。このさの活語ゐて古今集冬「ゐづれをうめとてきて為ちよゐ木のもとゐ」同書秋下「ゐび人のてきてゐてきと云ゝ同書雜下「雪ふるゝけてきゝを見むとゐて」續後撰集秋上「ゐを鹿のむぬゝ為ゐするゐきの歌ゑら」ゐれらハ業ゐつきさるゐかさゐて下二段ゐてけと云ゝり。除ハ四段カ段。キ段。中二段ヤ段。ヤ段。下二段ラ段。ラ段。と三ゐ活けゝ。はて四段と中二段とゐ彼方ヘ依らゞ点するゐて避字ゐ當り。下二段ハ此方ヘ依せゞ点するゐて防字の意なり。よき点第二音ゐ居ゝると。よけと第四音ゐ云ゝとの別ゐゐを思ふ点し。貯憂譬味ゐ点を八衢ゐ不審ゝされど。是らも中二段。下二段。ニ段。このさゐ活て意も聊差別ゐるへき点ゝ八衢ゐ「中二段と下二段とゐ活きて同ゞ意ゐるゝ例なし」と云れど萌を續日本紀ゐ毛延と書き。萬葉

集ふ孫枝モモイカ毛伊都追と云ふを見れば。也行中二段と下二段とふ活さるなり。又山口榮ふ。うれひハれのれと心ふうき事の云ふを云ふ詞。られへて心ふ云ふる思をうち出てうら〳〵冬人ふすうりてうさふるもうのふとをいふ詞とうれさるう冬もたもたるいなり尚よく考ふべし」と云ふるもよく意を著けさる説ふり。案ふ野味譬ふども中二段ハ其れもむき狭く深く。下二段ハ其はま廣く浅し。さゞ其緩急ふらりて分れさるものふて。深きゆゑ云ふるふそ云ふらざふべきなり。阿久留と云ふ詞ハ。下二段列列ふり。夜ふ云ふ冬きハ自然。戸閉ふどふ云ふときハ令然ふり。猶挙て數ふ冬ならば。如此自他冬毛ふ同ド活ふ系ふり。自他ふより て活の異ふるふり。二ダうさふ活て意の異ふらば系ふ冬ふ意ハ同ドくて二ダうさふ活くふり。二ダうさの活ふるが互ふ冬ふ換ふて。自他を異ふするふ冬。同ド活ふるも其物ふ依りて自然と令然と違へるふど。冬こうくふ理ふど推て定むべき業ふ冬ふらば。熟考るふ言語の活用のミふらば。大ふ定はる物ハ極まるふ冬ふく。星のや冬りハ天津日ふ先ざち。月ハ日ふ後れて。其行道ふく同ドからばれ冬も。天壤無窮ふ四時の違ハばるハ。大塊の大ふ定まる冬ふろなり。此天經を初め。両間ふ行ハるゝ物。何ら此趣を離るゝふとの有らむ。人の體貌。山のさゝばまひ。水の流れ。草木。禽獸。蟲魚。拳石。ふ至るまで。大ふ同く女く異ふらばる物ふ一。四肢右の敏ふるハ。人の天稟ふれども。中ふ冬稀ふ左を利一とはるものなり。盡く活物の妙理ふ

志て。人智の測り知るべきかならぬ。弓射るもの、百發百中なるも。力の限り引撓めて。天に參て發さむに。矢勢竭て地上に落る事き。其遠近必所を定むべからぬ。人事ほらかくの如し。況造化の天工をや。世の形勢なるも。積善の餘慶。積不善の餘殃ハ。大に定まる事なる。孔子の不遇。盜跖の安佚などハ。甚く極らぬる事ころかて。云もて ゆけバ皆同じ條理に帰んと有ぬ事き。安永の往昔文久三年まで 九八十五六年本居氏。係辭結辭の古例を考索して。紐鏡詞瓊綸を著し。三條の綱を張り。三轉の證歌を挙ぐ。其他種々の規則を三ゐれども。是を以て盡く推究るに事ならさハぬ。

変格數種を設て。餘論猶區々あり。文化五年今年まで九五十五年春庭父の活用表に事づきて。詞八衢を作る。受辭を示し圖をたへ製りて。四種の定格嚴に。其工夫に事めるら この形ルども。又三等の変格なり。其後天保七年今歳まで二十八年若狭國の僧義門。此二書に就て山口栞を著ル。論説い事細やり形り事に入へども。只此二書の旨趣を主張するのみにて。天然活物の理に心ゆるゝ故に。往々窮する事ある有りて。又疑ふ數條を存せり。今我此書どもを見て。聊思ふに事を云むとル。詞瓊綸三轉證歌ナハ段。是ハ右まる中まゝ左とかりて。古曽と係りてま

まと結びさる古歌の。一首も無ハ以この如る事かゝ。古今六帖ニ來むとハ云て古ばりしよ京も有しかゝ花後さぬしも古るまつ小後さまを京」詞瓊綸ニ結び辞さゞへりとて。玉の緒操てけか「まはきまを寫し誤りてまはきろとせるならんとも思へど。なかつらくゝふ味ひゑルバ。はゑハ何とるくゝ何さをこのかきこゆ古をまつ小後さルるものなルと云意カて。彼を云ゑのをしかふゑまどひけるよとゞらむるも京云ゑるさくひの変格かてゝ後とかくあどハ物せしかをゝ」ふ夜しくゝルかゝ」古」その下をまいと結ぶハ語格なゞらはて」なてづいなろ詞ねきとるりて。なづのしからぬ故かゝ。古き歌どいもふをまを京とるへりて結云さり。はるを詞の玉の緒などふ。むすゞ辞さゞへりとて。ゆそルさるな京もあルど。古ルハまゝといたんよりてなゝ〳〵まはまろゝ。うちゝ。さルをなるぶちか。むがな京とゝ決めゞさし。此類なゞ後なるを」栄花物語玉のかゝざてかかもゝ京ルふしゑ後ハかへすかこのさ京ハど泪のこ古百

十

袖ふかゝまを」詞瓊綸ニハ上の六帖の歌と並らべ拳さく結び辞さゞへる歌とせて。操てなかハ袖ふかゝまを」と有しを寫し誤ルるかゝなゝらはなるゝ。なれも上のまつふまはまろの並ふハれもそれを。同じこ京のなゞふまを」なルど。六帖のまるとなと云歌ハ京。諸説區くゝふして一定せば。何まふも古曽と係て。礼くと結ゞさるな京の無きハ。三轉の格の全ならばなるゝ。はて紐鏡の三條と云ハ。右そも徒とハ徒とハ徒とハ徒そのもの何なそ以ふ辞のなきをの今うりふかくゝ以ふなりの結ゞ一條。中そのや何いくゝ京ふまを」の類ゝなる同じ」の結ゞ一條。右なそのの結ゞ一條なり。その右ハ截断言。中ハ連躰言。上ハ係辞なりて。それ以應ゞ京とき右ハ行の辞どりと同じく截断して。連躰を変ずるハ。言語の妙なる物なり。左ハ激する辞。上ハ古曽なくて。ゞど受ルバ已然の辞と

も又使令の辞どもなり。此二種上か古曽ならばバ已然使令の意なり。詞瓊綸か「古」の三條の大づゐをざか考り得てを。むすび、さらんちゞのてかをそも。そぎ〳〵れとのづゐら。はをらゝかゞけるりれて。はれのみざれもゐらゝむ「是を規則考して。合ふを調さり考し。合ざゐを如ゐ古考ゝ定めさゐゐり。然れど為家卿集か「待ゐけて語ら ふ声を郭公今年も聞けバまづゐげゐゐ」此卿の頃ハ時代も後ゐれバ。若ハ誤かハならばるり此疑ゐゐきか しもならざれど。萬葉集十三長歌かも擣渡作相語妻遠詞瓊綸かてゐをは違へるか似て違へる同書七か殊放者奥かならざる歌の中かも見えるも 従酒嘗湊自辺著時尓可放鬼香」むと本居氏の説ゐり然もど古曽ゐくて語妻と云ふるも有れバゐゐ。有りて彼ゐなゐのちか訓の誤とも云ふきなりゐゐ。

為家卿の歌もまつと云勢より激して。自然也となれゐかて。誤かハならばるゐり。はもならばあれはもゐへと まれかくはれされあど意の敞ほる時ハ也へめゐど たのゐうゐ云るゝものかて。必古曽の勢か應ずる定め ゐも云ゐ。ゐさく。一格ゐ以如ても如ゐめゐきなり。はさ古 曽ハ三條の中かも殊か重くして。花行の辞か局りさる 格ゐるを。萬葉集十四か。「古呂賀於曽伎能安路許曽要志 難衣有 ゑしハ詔かて催馬樂大「古ぜりこそゆでゝもうまし」 毋「右行の辞ゐり 拾遺集長「古ざうき陰とゐふゐれん物 うはゝの「ゑ是 も右行の辞ゐり 歌 と古曽みし」見しハ過去の志かて中行の辞 但し家集かハ古ゐ見也とゐり蜻蛉日記か

「萬代をよバふ山べの雨乃こ古曾君らつのふる齡かる
べし」「べしハ右行の辞」是ら見てさして。左行の格乃ゆゑいからぬ
を思ふべし。又中の條かるハ紫式部日記ハ。「文のちうハ
史記の文帝の巻をぞ讀ハ給ふべし」同書釈ハ「べしむべき
しされど。古云て彼格と云ものハ「欲」んとしさる業ハて
甘心せぬ。よむかるべきと云物ハひざゆゑ有ぞくもゆら
ざるなり源氏物語空蟬巻ハ「たゝ云ハしハ也ハなれかり」拾
玉集ハ「郭公花橘ハかく声を思ふ云ハ也ハつらしき
ハ「かな草庵集ハ「くゆ深く見ぬ野澤の埋れ水ハてとも」
古ハ「ハ飛ふ螢ハ「かな新續古今集ハ「天つ空霜も満ぬる夜
も冬ても月ハ亟行く鐘の音ハ「かな」道助法親王五十首歌

ハ「春霞朝さつ袖もこのをルとも梅咲く山ハ吹く嵐ハ「なな」
べし「なり」「ハ何」「ハ」「ハ」「ハ

ずして調をかしとるかて。是まさ活物の趣を出ざるものなり。但しかくのごと云てハ。何と形くちざりかたけるやうかも聞えかんか。大方輕重緩急の等きハ尋常なり。輕重緩急等しかるべしてハ趣を形ハ活物の上か何の疑なしき事ハなけむ。警バ雜劇かさやうなる音ハ志よりうちならめと上下等しき音声かうこい音を輕く云ことなるけれもむきなるけ音しと云た常の事かさそんなるとて音声を勵しよしかなよ強弱緩急ハ萬物の形勢其甚しきかに至りてハ多い変格反對と云た音の有るかと思ひたれ居し

た。其事の勢かよりて。辞の輕重を等しめけして。調を形しなる物と教をきなり。然るを詞瓊綸か「堪能の上かてさかけ音稀なる事かて云ふみざるかをよむはしきを

音を知をしと云へるハ甚深の理など含(コモ)りならむやうかも聞えて。初學の惑べき云ハきまなるかや。堪能の上ならでも。重く係りて輕く結ぶ。急か云下して緩か音ぢめはかしと思ふ趣も。形どう心かうむばらむ。古歌を論ふて。何の音ぢい無く。一首の上を見てとして。其論辯無量なり。近世の如く。語格氏か遠波など別か音り放ちて。例證などか當て論ずる事をかのみしなを見をし又玉霰か。詞か三の云ばまなる事て。猶下か云を見をし又玉霰か。詞か三の云ばまなる事音云へる條か。「花か咲くとはいふと今咲ける音。けるとはいふ花咲とると同じ花音かて。咲てなる花音。咲しとはいふ。前か咲しを後かはいふ詞なりと云へるを實か然らで花有べからばる理なり。俚言かも此格なるて。行ハ已然

もイツタ。眼前もイク。將然もイコウ冬云。若シ此格ならむかハ。昨日も今日も明日も其ていさめ無らるべきかて。然るを日本紀孝德天皇の巻阿我柯賦古麻乎。比騰泳都羅武箇。是も未然を過去れ辞かて讀給へと。又眼前の事をいるるハ。萬葉集二か人麻呂柿本朝臣「我振袖乎。妹見都良武香」と

ふるも眼前の格。みつた俚言の見なり。後より云格。或本反歌として挙

ゝるハ。「吾袂振乎。妹見監鴨」冬見えゝるけんも過かに事を云辞かてつと

大ゝゝ同じ 古今集か「春の野か若菜摘んと来しものを散ゝふ花か道ハ迷ど云ぬ」同集物名 ふるもへてゆさふるはと

い花見んと来しをかほ云ぞつゝろ云かけゝる後撰集春下

「色深くかほ云しは古冬ハ藤浪のゝちもかへ良て君と後

北冬ゝ」是ハ兼輔朝臣の歌なり。家源氏物語胡蝶巻「はせ

集かもかかゝしとかも

の内か根ふゝく栽し竹の子ゝ比のごゝ比ゝかゝ生云て

ゝゝるゝき 是ら来しハ来ゝる匂云しハ匂云ゝる栽しも

「うゝゝ」と云意かゝ過去ゝり現在かゝたよぶ

冬紀ゝかゝ云辞なり。過去の志かルゝと

て過去し事のゝ冬思ふも委しゝゝゝ同書夕顔巻ふ「ゝの

ゝつゝる御隨身して云ゝゝゝゝくて後より云格なるを御

ゝゝゝゝ

るべし。天智天皇崩御の後。放鳥の水海かうのへふを。大后の見そなはして。ちみ給へるなれど。オモヒとと云ばれば彼格か當らばるを同書三か古之。七賢人等モ。欲為うくよまヒさまへり

物者。酒西有良師。」

ホリスルモノハ多現在の格か云へふを思ふ故に又未然を現在の辞かて云へふい

伊勢物語か。「二人して結し紐を一人して逢見ふまてハ解りじ多ぞ思ふ」是を逢見んと云べきをかく云へり。異本會見流左右とかいうんと書るも有きど。真字本かなもあらばふ多きなり。寫誤古今集恋四「ふはでのかさみ多てさそ多い多けめ泪かうつぶ藻屑なりけり」金葉集雜上「いそ菜つむ入江の浪乃立つへり君見ふまでの命とも」是を見るか海松を兼さる故なり。何も逢見ん逢んまでの君見んまでの意かて未然ふるを加く云へり

古も事のはまと。語勢と。調とか依て。ゆ多さはぐふるも

なりて。必ズ三ッの云ばはを等閑かたてよし多ふをならばる古今

とて此三ッの云ばはを等閑かたてよし多ふをならばる古今

集春下「春ふ多ふ花の盛りハ有ふめど逢見んちとも命

ありけり」後撰集離別「ゆるルトとたとか結ぶて別るル

を逢見んまでハ思ひみざるふ拾遺集秋「ゆといせれ一

夜と思へど姉機の逢見ん秋の限ふきりふ」是らハ彼大

か定りさるりとの本居氏のいえゆる常格ふり必前か

云へる如く未然を現在か云へも之のと頃か思ひ惑ふべふら

ばば猶未か辨はさ自他のきをやりふらばるも有り。詞の通路

ふべきなり

か吹いるを吹ゆるいと多くいをり。是も浪のよばるとと

いへふはまと同じくそのゆるい呼をむぬといへるか

て。他か然する案か通路の説ゆこの。其所を主多して云へ

詞の方なり

でとて。然らばむる物なくて。令然の格か云。て補ふべき

や是皆輕重緩急の勢に依るものにして。實に言語の妙用なり。凡ての詞大方異樣なる用法もなるべし。稀稀ういふ趣の見えたらんかは。譬へば冬の季(スエ)は春に近く。春の初は冬に遠ざかるべし。かくて寒威烈しき冬きは。春に至て堅氷深雪なり。暖氣盛なるをりは。歳内に春景を催ほす如し。言語の用法は是に似たるものなり。「ふる袖を見つらん」なる「つる」の見つ有つるなども過去の辭なれども輕くして過去の意は有り無りの如し。依て古格あど云ふ事に拘らずして。現在の事に用ひたるなり。春庭此に意著ぼして。通路の巻末に此類の詞ども數多書出て「是らもよしなるべけ迚」などいまだ考へべきことなるべしとさり其詞

どもさりゝ故なりて。一樣にいはれども。語勢は其變化極り無き理は一ツなり。語勢は緩急輕重に依て其語勢と云ふは何なる物ぞと云ふか。兵家の書に。激水之疾キ至ル於漂(スヒ)石者勢也(ナリ)とあり。物に理外の理乃ちて來るなどく。多く此勢に依るものの形り。其理外の用法を一ツ二ツ挙ぐ。後撰集春上「松も引き若菜も摘ずなりぬるを」引きは不源氏物語螢巻に人「引の意」なるゝ櫻をもゝ咲くなん」の心破りにはやまちにはゝ人はかなくさそはれけ迚破りなり不是らは俚語に「水汲三手鍋も提ズシテハ云云」なる云が如く。下の詞乃勢に上の詞乃格を轉ずるなり。萬葉集九に。「入水火(ミヒニイリヒ)尓毛(ニモ)将入(イラム)跡(トヘリ)」を連用言なるを下のいらむの將然言

かゝられて上も將然のい」らむの意か轉るハ勢なり」是も同ト趣なれども。其勢輕
緩なるが故か。打讀むか意も著ク。上なるハ其意表裏か
ちへ顛倒しさり。古今集春上「櫻花春くたゝ年ざかも
人の心かからしやもせぬ」「かゝるかもせぬい飽なる意か明なる語勢の一格なり」土佐日記「いのゞもかなしきハ普通かハ悲しからぬを云なり然きを悲しき事か云ハ語勢の一格なり」枕冊子ま「いのゞめでたからぬを云なり」「めでさらぬを云なり」「其意聞えさるを」「いのゞを冠らせて悲しとれしふを強むるも語勢の一格なり」「のを」皆語調の勢か依て。普通の物云さはを傾覆せるを。激水の石を漂ハと同一理なるものなり。又古今集春上「青柳の糸よりかくる春しも

ぞ乱まて花の縒ぬかけろ」「しも物を強く云ふ辞なるを。弥強く云ふときを。其意裏へのをりて。俚言のケツクなどいふ意か實か不測の処理とかるなり。此歌のしもハそもなり」云ふべし。又詞瓊綸か。「れかよそとの上を切るゝ格の辞よ
ま受るが定はりなり」切るゝ格の辞とい。ゑも鏡と見え
さるはるかを受なり。然るか詞花集恋「かゞもかくくるゝ
と思ひしゝ冬の日ゆ心も冬かきをりも有けま」「詞瓊綸か此歌を
挙ゝて續後拾遺集風雅集。新拾遺集。等の歌を挙て「右の歌すゝるか冬の上の受る辞の格さかへり」と云「り如斯
ハ代集中かも見えさるハ誤とも定むべからぬ。物語書
かどかも殊か多なり。其きはふ依りてハ。何もか續けも
も難かきなり。萩原廣道ゲ夜しぐれるもゝの下ま
殘る意をかめてゆ云さしるをとゝうけさろかて
ざかゆをはめさる格か強て格と云物を立むとゆ
ゆをはらばと云るハ説かて隨ひ難し又むの

も同格のよしなり。ちなれど是も後撰集春下「春来ぬれば咲くてふ花をぬきぬかきねるたのもの花かぞ有ける」新千載集雑中「春むきけむ親のいはめのかなしきふもふるばこのもの道を見せむやもはべ紐鏡中行のちぶばどもよこのふる事ども云。もてゆうばい巻ちちく。物ぐるはしきはまふもかりぬぎきかり。かくて近世人のしてもやほ語格と云ものを熟考ふるか。古の人乃言語か格なる也。譬ば李候適宜の衣服を著るが。其中か四時の品有ふが如し。然るを今の語格を云人ハ。其四時の衣服を暦日ふ合せて著るが如く。をりかふれてハ。温凉の肌膚を冒ほ古巻も有ぬべきふり。適宜ハ疎ふるふ似て天然か近く。格より求むるハ。密なるが如くふれ巻も人事を免ろれざれば。巻うくふれてそげふる趣を含めり。此さうも よくくを用べきなり（小夜しぐれか「歌の巻ぢめはらいそらいふるそられふど）ふふ殊か聞ぐるしき改ふや。ほろ例どもハうちとかしこ。されば格ハ格として猶よくかふ一の脚ひざはを見てとしく初のよべしと云へるハ今れのが論ふあ巻とも其意異なれども。格ハ」格として古へを考へよと云ふ。此學ぶの確言と云べきふり 詞ふ種くのかさちはきなひふるも。も巻天工の活物ふふが故ふて俱かく云て詞ふ霊妙のみふはさもり。言語れのおら活動をふやうかも聞えふんか。萬物の霊さる人身の性情發見の樞機なれば。言語なはして直ふ天工の活物と云むも。大方違ふ 萬葉集か言霊之左吉播布國はさ事「ト多マノ」「サキハフクニ」「ト」

靈之所佐國」抔とも有りて。微妙不測の靈に依て。天機の活動に委ねまゝなり。さまゝと委より定格と云ふも無く。定格なければ変格と云ふとも無く。何れも公と一の詞乃用法にて有けり。はた彼大に定まる方より見れば。巻首に挙げし四種を初め。其法則嚴に備り。又極く極らぬる方より思へば。変格其他はなべて一定せぬ。如此定まらぬして極り。極りて定らぬ。天然の妙理。以て奇しく。以て霊しく。口に筆に盡し難らぬる事なり。漢土の詩に。二四對。二六不同。其他常格に合ざる事ども。皆大に定まらぬ。故に極らぬる故にはしば此道學ぶとする人。なべて古歌にも古文に慣るゝを先務とすべし。格のうさより妙用を求んとすれば。真の範を知らずして。牡丹を描くが如く。ようせぬ芍藥のやうなる物もいで来ぬべきなり。

東都書林　山城屋佐兵衛藏板畧目録

日本紀畧　全十冊　日本後紀　十冊　令義解　十冊

通鑑綱目　阿州板百十七冊　康熙字典　小本四十冊　四書集註　十冊

尚書正義　十冊　小學合纂　四冊　小學　校本　二冊

漢魏公全集　十六冊　周易述義　八冊　管子纂詁　十二冊

甘雨亭叢書　五集揃四十冊　同薄葉摺　帙入五冊　同別集　八冊

唐陸宣公集註　十冊　音訓改正四書正文　五冊　遂初堂易論　一冊

歐陽論範　二冊　藝林蒙求　六冊　闢邪小言　四冊

獻替録　三冊　同後編　二冊　劍甲新論　一冊

新論　曾澤先生著　二冊　正志齋稽古録　同上一冊　責難解　同上　一冊

蘇東坡詩集 紀曉嵐批評 十冊　陶淵明集 三冊　中唐廿家絶句 三冊
晚唐詩選 四冊　晚唐詩鈔 十六冊　宋詩選 二冊
真山民詩集 一冊　宋三大家絶句 一冊　廣三大家絶句 一冊
宋詩清絶 一冊　曾茶山集 二冊　談唐詩選 一冊
王荆公絶句 四冊　李忠定公奏議選 一冊　宗忠簡公文鈔 二冊
隨園文抄 三冊　朱之蕃詠物 一冊　西湖竹枝 二冊
金詩佳絶 一冊　三體詩 横本 一冊　三體詩絶句解 三冊
古今名詩選 一冊　穀堂遺稿抄 四冊　今四家絶句 二冊
栗山文集 五冊　栗山詩集　司馬文正傳家集選 六冊
寧静閣詩集 初集 五冊　同 二集 三冊　放翁詩話 一冊

西遊記程 一冊　宋三家詩話 一冊　誥然齋詩話 一冊
徐而菴詩話 一冊　徐而菴雅談 一冊　五山堂詩集
五山堂詩話 五冊　同 甫遺 三冊　同 和歌題絶句 一冊
墨林奇標 初集 二集 三集 四集　晚唐百家絶句 五冊　元寇記略 二冊
幼君補佐心得 一冊　士道要論 一冊　水雲問答 一冊
一志通惠
近古史談 四冊　孫子合契 二冊　古文孫子 并略解付 四冊
孫子詳解 十三冊　繪本孫子童觀抄 前編 七冊　同 後編 七冊
四戰記聞 四冊　國朝砲煩權輿録 一冊　武術流祖録 一冊
左傳雕題略 六冊　左傳附注 四冊　左傳補徐 一冊
楊子方言 一冊　孟子約解 三冊　清三朝事略 一冊

三字經 大字 一冊 同 小字 一冊 同 大本 一冊
候鯖一臠 五冊 大學私衡 一冊 東西周考 一冊
心畫軌範 一冊 冢田學語 一冊 素餐錄 一冊
海外奇談 三冊 海外異傳 一冊 虛字啓蒙 詩用虛字 一冊
繪本古文後集 初帙 五冊 同 一集 二集 四集 五集 羅浮幼質 一冊
神兵稜威考 一冊 同 後篇 一冊 訓點考 一冊
活語新論 一冊 人物鑑 一名滄海集 一冊 神道の山ふみ 二冊
富士百首 一冊 禪居集 三冊 苔清水 三冊

加茂翁家集 五冊 同 歌集 二冊 同 文集 三冊
玉籠集 三冊 武藏野集 初篇 一冊 同 二篇 二冊
貫之類題集 二冊 類題採風集 初篇 二冊 同 二篇 二冊
紐鏡ろヒ詞 一冊 き志わ以草 一冊 大日本史名稱訓 一冊
桂孜落葉 初篇 二冊 同 二篇 二冊 後撰集標注 四冊
記紀哥集 二冊
日光山志 五冊 甲斐叢記 五冊 成田名所圖會 五冊
草木育種 二冊 同 後篇 二冊 音訓國字格 一冊
君子訓 二冊 童子訓 三冊 養生一言草 一冊
常陸志料 關城繹史 一冊 常陸志料 郡鄉考 三冊 官職通解 一冊

朱子家訓抄 一冊 江户大節用海内藏 二冊

靈樞識 十冊 金匱正義 四冊 本草百種錄 三冊

醫學讀書記 一冊 雜病廣要 四十 救荒本草啓蒙 五冊

本草圖譜 山草部 四冊 同 芳草部 一冊 療治夜話 二冊

醫餘 三冊 霍亂治畧 一冊 掌中名物筌 一冊

傷寒雜病類方 二冊 日用方物略 一冊 手板發蒙 一冊

麻疹良法 一冊

校正 七部集 横本 二冊 芭蕉句集 一冊 俳諧玉葉集 一冊

誹諧礎 二冊 御諧類題玉訣集 二冊 闇雲愚抄 一冊

一茶句集 二冊 百々人集 二冊 大和詞 一冊

耳比摩利帖 正面摺 二帖 羲之十七帖 一冊 懷素千字文 一冊

子昂赤壁賦 一冊 内閣字府 一冊 同 首書 二冊

廣澤千字文楷書 一冊 同 行書 二冊 同 草書 二冊

廣澤越王帖 一冊 同 醉別帖 一冊 醉銘帖 一冊

東江蘭亭 一冊 同 春晏帖 一冊 同 續 一冊

新撰年表 一冊 掌中新撰年表 一冊 改正蝦夷圖 一折

地理全志 上帙五冊 同 下帙 九冊 和漢合統 支今字標考附 一折
萬宝玉手箱 一冊 萬宝新書 一冊 同 一篇 一冊
遠西解毒編 一冊 萬國政表 一冊 西字發蒙 一冊
蘭語通 一冊 同 一篇 一冊 同 三篇 一冊
和蘭文典字類 前篇 冊 同 後篇 一冊 蕃語象胥 二冊
英吉利文典 一冊 三語便覽 三冊 五方通語 三冊
英語箋 三冊 同 一篇 四冊 魯西亞字筌 一折
萬國旗章圖譜 一冊 萬國地球圖 一折 萬國方圓圖 一折
扶氏診斷 三冊 理學入門 二冊 脉論 一冊
内治全書 一冊 内外科要法 三篇揃 六冊 窓篤兒藥性論 六篇揃 十八冊

氣海觀瀾廣義 五篇揃 合六冊 遠西奇器述 初篇 一冊 同 二篇 一冊
三才正蒙 三冊 量距尺表 并運用發微 二折 射擲表 一折
砲術訓蒙 四篇揃 八冊 施條砲射擲表 一冊 野砲演習式 一冊
山砲畧說 一冊 遠西武器圖畧 一冊 遠西記略 二冊
合衆國小志 二冊 琉球入貢記略 一冊

頭書講釋和漢朗詠集 二冊 野馬臺國字抄 一冊 須彌山圖解 一冊
用文錦字詩抄 一冊 群蝶画英 一冊 將棊駒々らべ 二冊
量地必携 一冊 八部秘 一折 櫟甲圖哥 一折
大學 道春點 一冊 中庸 道春點 一冊 正信偈 一冊

千字文　一冊　四書字引　一冊　同捷徑　一冊
御成敗式目　一冊　實語教　一冊　同うな附　一冊
商賣往來　一冊　同うな附　一冊　同中本　一冊
初學古狀揃　一冊　百人一首 中本　一冊　同半紙摺　一冊
女今川操鑑　一冊　小野篁　一冊　旅中懷宝　一折
袖玉道中記　一冊　同增補　一冊　下總圖　一枚
年代重寶記　一枚　松島圖　一枚　俳諧名掌題繪　一枚
省文露抄　一枚
古狀揃 猪瀨先生書 一冊　實語教 同書 一冊　商賣往來 同書 一冊

發行

書林

京都三条通松原下ル　勝村治右衛門
大恕齋橋茶屋町　河内屋喜兵衛
同南壹丁目　敦賀屋九兵衛
江戸芝神明前　岡田屋嘉七
同　和泉屋吉兵衛
銀座三丁目　山城屋政吉
日本橋通二丁目　須原屋茂兵衛
同　二丁目　須原屋新兵衛
横山町三丁目　和泉屋金右衛門
淺草茅町　須原屋伊八
日本橋通二丁目　山城屋佐兵衛梓

藤原淑蔭大人著

活語新論 全

江戸書肆　玉山堂

日本
江戸第二街
玉山堂記